

## 島根県産陸棲哺乳類目録

大畠 純二\*

### A List of Land Mammals in Shimane Prefecture.

Junji Ohata

#### はじめに

島根県産陸棲哺乳類の目録は、1980年に島根県農林水産部林政課より『島根県に分布する獣類』が刊行されているが、その後、筆者自身が新たに生息を確認した種があるため、ここに『島根県産陸棲哺乳類目録』を掲げることにした。陸棲哺乳類とは、陸上を主な生活環境とする哺乳類のことである。

島根県には、江戸時代末から明治時代初期頃には約40種の哺乳類が生息していたと考えられる。これらのうち4種が、今日までに姿を消した。ニホンオオカミは江戸時代末頃に日本から、ニホンアシカは昭和時代に入って島根県から姿を消している。ニホンカワウソとニホンカモシカは明治時代から昭和時代の間に島根県からいなくなつたが、ニホンカワウソは四国ではまだ生存の可能性が残されており、また、ニホンカモシカは他県では今も多数が生息している。

日本産哺乳類は、ヤマネなど目に触れにくい限られた数種以外は日本人にとってあまり珍しいものではないが、陸棲哺乳類の36%は日本列島に固有の種である。島根県産の在来哺乳類では14種(35%)が日本固有種である。固有種かもしれない6種を含めると20種となり、実に県内産在来哺乳類の50%を「日本固有種」が占めていることになる。現在の島根県内には、第二次世界大戦中から終戦後に日本に移入されたチョウセンイタチとヌートリアの2種の帰化種を含めて、38種の野生哺乳類が分布していることがわかつている。

なお、ニホンアシカは、休息や出産は陸上で行うが捕食や移動は海中で行い、主な生活場所は海中であるため、海棲哺乳類とすべきである。しかし、過去に隠岐諸島など県内の島嶼で繁殖していた事実があり、また、島根県が最後の生息地であったかもしれません。さらには、本種が人為的に絶滅させられた種として象徴的

であるため、この目録の中に取り上げることにした。

以下に、県内産陸棲哺乳類(絶滅種を含む)の種名と県内での分布の概略等を記す。

#### I. 現在又は過去に生息が確認されている種

##### 食虫目(モグラ目) INSECTIVORA

###### トガリネズミ科 Soricidae

1. 固 カワネズミ *Chimarrogale platycephala* (Temminck, 1842)

分布: 隠岐諸島を除く県内各地の河川流域(分布はやや限定)。

島根県: 準絶滅危惧NT

生息環境が河川流域に限られ、捕食や移動に川を利用しているため、水質汚濁や汚染、河川改修、淡水生物の減少などはカワネズミの生息に悪影響を与えると考えられる。

2. 固? ジネズミ *Crocidura dsinezumi*

(Temminck, 1844)

*C. d. dsinezumi* (Temminck, 1844)  
(サイゴクジネズミ)

分布: 県内全域に生息するが、目に触ることはあまり多くない。

韓国済州島に別亜種(*C. d. quelpartis*)が生息する。

###### モグラ科 Talpidae

3. 固属 ヒミズ *Urotrichus talpoides* Temminck, 1841

分布: 県内全域、農地や草原、山林などに普通。

県内産を以下の2亜種に分ける場合

\* 島根県立三瓶自然館、〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8, Tane, Sanbe-cho, Ohda-shi, Shimane Prefecture

- もある。
- 隠岐島前・島後 *U. t. minutus* Tokuda, 1932 (オキヒミズ)  
本土側全域 *U. t. talpooides-hondonis* (チュウゴクヒミズ)
4. 固 ミズラモグラ *Euroscaptor mizura* (Gunther, 1880)  
分布：三瓶山北の原？ 分布は局限される。中国山地の広島県境付近にも生息している可能性が大きい。  
2000年に三瓶山北の原で収拾されたキツネの糞中に、1頭分の頭骨と下顎骨・上腕骨・骨盤・椎骨等の骨片や体毛が含まれていたものが県内初記録で、2005年末現在これが唯一の記録である。頭骨の形状は、ヒワミズラモグラ *E. m. hiwaensis* (Imaizumi, 1955) に似る。  
島根県：情報不足DD, 環境省：準絶滅危惧（亜種ヒワミズラモグラ ssp. *hiwaensis*）NT
5. 固 コモグラ（中国地方産小型モグラ）  
*Mogera imaiumii* Kuroda, 1957 ?  
分布：三瓶山北の原・出雲市馬木・江津市桜江町下城。県内での分布は限定される。1995年に出雲市で採集された個体が、県内初記録。  
近年では、コモグラはアズマモグラ *M. imaiumii* の小型個体群とするのが大方であるが、一方で、中四国産小型モグラは紀伊半島産と共に別種の可能性があると指摘する研究者があり (1988. 土屋)，今後詳しい調査が必要である。ここでは「コモグラ（中国地方産小型モグラ）」の和名を用いておいた。  
島根県：情報不足DD
6. 固？ コウベモグラ *Mogera wogura* (Temminck, 1842)  
分布：県内全域  
朝鮮半島と中国大陆に産するチョウセンモグラ *M. w. coreana* はコウベモグラと別種であるとする説があり (1988. 土屋)，これに従えばコウベモグラは日本固有種ということになる。  
かつては、コウベモグラに *M. kobeae*，アズマモグラに *M. wogura* の学名が与えられていたが、その後、タイプ標本が調査し直されて、*M. wogura* はコウベモグラに与えられた学名であることが判明した。その結果、アズマモグラの学名は、*M. imaiumii* となった。
- 注：食虫目は、生活空間が地中と地上にほぼ限定されている。とりわけ、モグラ類は地中生活に特化しているため、幅広い舗装道路とその縁石や側溝などの存在や、都市化などによって群れが細切れに寸断される恐れが極めて大きい。
- 翼手目（コウモリ目）CHIROPTERA
- キクガシラコウモリ科 *Rinolophidae*
7. キクガシラコウモリ *Rinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)  
分布：県内全域の洞穴。普通。  
島根県：準絶滅危惧NT
8. コキクガシラコウモリ *Rinolophus cornutus* Temminck, 1835  
分布：隠岐島前を除く隠岐諸島以外の県内各地の洞穴。普通。  
島根県：準絶滅危惧NT
- ヒナコウモリ科 *Vespertilionidae*
9. モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)  
分布：県内各地の洞穴に生息するが、単独または数頭で見られることが多く、100頭を越えるような大集団は見られない。  
島根県：準絶滅危惧NT
10. ノレンコウモリ *Myotis nattereri* (Kuhl, 1818)  
分布：[温泉津の一部] (分布は極限)  
1988年に大田市温泉津町西田の使用されていなかった矢瀧トンネルで初めて冬眠が確認されたが、その後、トンネルが改修され使用されるようになって姿を消した。  
島根県：情報不足DD, 環境省：絶滅危惧IB類EN
11. アブラコウモリ *Pipistrellus abramus* (Temminck, 1840)  
分布：県内全域の市街地、集落周辺。  
日没後、まだ明るいうちから活動を開始する。
12. ヒナコウモリ *Vespertilio superans* Thomas, 1898  
分布：[隠岐島後] 隠岐の木村康信氏が所蔵する、島後の旧西郷町有木で採

集された標本1点のみ、たまたま飛  
来した可能性がある。

13. ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)  
分布：県内全域の洞穴や廃坑。  
島根県：準絶滅危惧NT
14. 固？ テングコウモリ *Murina leucogaster*  
Milne-Edwards, 1872  
分布：江津市・大田市・邑南町の廃坑で  
冬眠確認（分布は限定）。  
島根県：準絶滅危惧NT, 環境省：絶  
滅危惧II類VU
15. コテングコウモリ *Murina ussuriensis*  
Ognev, 1913  
分布：隠岐島前・益田市の一部・三瓶地  
域の山林（分布は限定）。  
島根県：準絶滅危惧NT, 環境省：絶  
滅危惧II類VU

注：翼手目の分布は、それぞれの種が確認された冬眠  
や休息の場所である「洞穴や廃坑」で示してあるが、  
捕食のため飛行する場所は林間や森林の上空、川や  
草原などの上空であり、非常に広大な空間を行動圏  
としている。従って、それぞれの種が行動する範囲  
は県内全域と考えてもよい。コウモリの保護を考え  
る場合には、生息洞だけでなく、捕食のため飛行す  
る全域の生活環境をも保護する必要がある。

## 霊長目（サル科） PRIMATES

## オナガザル科 Cercopithecidae

16. 固 ニホンザル *Macaca fuscata* (Blyth,  
1875)  
分布：隠岐諸島を除く県内各地（分布は  
やや限定）。

## 兔目（ウサギ目） LAGOMORPHA

## ウサギ科 Leporidae

17. 固 ニホンノウサギ *Lepus brachyurus*  
Temminck, 1844  
分布：県内全域。県内産を次の3亜種に  
分ける場合もある。  
隠岐島前・島後 *L. b. okiensis*  
Thomas, 1906 (オキノウサギ)  
本土側中東部 *L. b. brachyurus*  
Temminck, 1845 (トウホクノウサギ)  
県西端部 *L. b. angustidens* Hollister,  
1912 (キュウシュウノウサギ)

## 齧歯目（ネズミ目） RODENTIA

- リス科 Sciuridae
18. 固 ニホンモモンガ *Pteromys momonga*  
Temminck, 1844  
分布：中国山地（分布は高標高の森林に  
限定）。  
島根県：絶滅危惧II類VU
19. ムササビ *Petaurista leucogenys*  
(Temminck, 1827)  
分布：隠岐諸島を除く県内全域の山林  
(生息地は激減？)。

## ヤマネ科 Gliridae

20. 固属 ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz,  
1845)  
分布：隠岐島後・県内各地の山林（分布  
はかなり限定）。  
島根県：絶滅危惧II類VU, 環境省：  
準絶滅危惧NT

## ネズミ科 Muridae

21. 固 スミスネズミ *Eothenomys smithii*  
(Thomas, 1905)  
分布：県内全域。県内産を次の2亜種に  
分ける場合もある。  
隠岐島前・島後 *E. s. okiensis* Tokuda  
(オキスミスネズミ)  
本土側各地（分布はやや限定）  
*E. s. smithii* Thomas (ホンドス  
ミスネズミ)

22. 固 ハタネズミ *Microtus montebelli*  
(Milne-Edwards, 1872)  
分布：隠岐を除く県内各地（分布はやや  
限定）。

23. カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas,  
1771)  
分布：県内全域の水田周辺、牧草地や河  
原などのイネ科草原。

24. 固 ヒメネズミ *Apodemus argenteus*  
(Temminck, 1844)  
分布：県内全域。県内産を次の2亜種に  
分ける場合もある。  
隠岐諸島の山林 *A. a. celatus* Thomas  
(オキヒメネズミ)  
本土側の山林 *A. a. argenteus*  
Temminck (ホンドヒメネズミ)
25. 固 アカネズミ *Apodemus speciosus*

- (Temminck, 1844)  
分布：県内全域。県内産を次の2亜種に分ける場合もある。  
隠岐諸島の笹藪や山林 *A. s. navigator* Thomas (オキアカネズミ)  
本土側の笹藪や山林 *A. s. speciosus* Temminck (ホンドアカネズミ)
26. ドブネズミ *Rattus norvegicus* (Berkenhout, 1769)  
分布：県内全域の都市や集落周辺（家屋内など）、隠岐大波加島など。
27. クマネズミ *Rattus rattus* (Linnaeus, 1758)  
分布：県内全域の都市や集落周辺（家屋内など）。
28. ハツカネズミ *Mus musculus* Linnaeus, 1758  
分布：県内全域の都市や集落周辺（家屋内など）。  
ネズミ科をその主な生息環境から野鼠類と家鼠類に分けると、ドブネズミとクマネズミ・ハツカネズミの3種は家鼠類ということになる。
- ヌートリア科 *Myocastoridae*
29. 帰 ヌートリア *Myocastor coypus* (Molina, 1782)  
分布：隠岐諸島を除くほぼ県内全域の河川流域。  
過去に飼育されていたものの子孫が、鳥取県日野川と島根県江の川から県内各地に分布を拡大していったものと考えられる。日本にはヌートリアと生態学的地位が同等な哺乳類がおらず捕食者も少ないため、島根県では急速に分布域を拡大している。
- 食肉目（ネコ目） CARNIVORA
- クマ科 Ursidae
30. ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus* (Cuvier, 1823)  
分布：主に中国山地脊梁部。季節的に、日本海岸近くにまで出現する。  
島根県：絶滅危惧 I 類 C R + E N, 環境省：絶滅の恐れのある地域個体群（西中国地域のツキノワグマ） L P
31. 固？ 絶ニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839  
分布：[中国山地]  
島根県：絶滅 E X, 環境省：絶滅 E X  
江戸時代末期か明治時代の初め頃に絶滅したものと思われる。  
『石見外記』、『諸国産物帳』等に記述がある。『石見外記』には、現在の浜田市金城町七条で目撃されたというかなり詳細な記録が記されているが、これが本当にオオカミだったのか野犬の誤認だったかは判定が困難である。
32. タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (Gray, 1834)  
分布：隠岐諸島（知夫里島・島後は本土より移入）を除く県内全域。
33. キツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)  
分布：隠岐諸島を除く県内全域。
- イタチ科 Mustelidae
34. 固？ テン *Martes melampus* (Wagner, 1841)  
分布：隠岐諸島を除く県内全域。
35. 固 ニホンイタチ *Mustela itatsi* Temminck, 1844  
分布：隠岐諸島を除く（？）県内全域（隠岐にも生息しているとすれば、人為的に「移入」された可能性が大きい）。  
島根県：準絶滅危惧 NT  
チョウセンイタチにより、山地域に追いやられている。
36. 帰 チョウセンイタチ *Mustela sibirica coreana* (Domaniewski, 1926)  
分布：隠岐諸島を含む県内全域（主に平野部）。県内でも飼育されていたかは不明。  
ニホンイタチは、チョウセンイタチによって山間地に追いやられているといわれて久しいが、江津市においては平野に接する丘陵の山林にニホンイタチが生息している。一方、三瓶周辺では池田地区でチョウセンイタチの生息が確認されている。ニホンイタチは人為があまり及んでいない環境を、チョウセンイタチはより人為的な環境を好んで生息しているように思われる。
37. アナグマ *Meles meles* (Linnaeus, 1758)

分布：隠岐諸島を除く県内全域。

38. 固？絶ニホンカワウソ *Rutra nippone* Imaizumi  
and Yoshiyuki, 1989

分布：[ ほぼ県内全域の河川流域 ]

『石見外記』、『諸国産物帳』等に記述がある。

島根県：絶滅 E X, 環境省：絶滅危惧 I A 類 C R

大正時代には県下に広く生息していたといわれている。江川流域など地域によっては昭和になっても生息していたらしい。

国際的には、ユーラシアカワウソ *Lutra lutra* の亜種とされている。

#### アシカ科 Otaridae

39. 絶 ニホンアシカ *Zalophus californianus japonicus* (Peters, 1866)

分布：[ 隠岐諸島・県内沿岸 ]

島根県：絶滅 E X, 環境省：絶滅危惧 I A 類 C R

隠岐諸島の北西約160kmに位置する竹島では、1972年まで繁殖しており、1975年まで目撃された記録があるという(1996. 伊藤)。

一般的にはクロアシカ *Z. californianus* の亜種に分類されているが、分布や体の大きさ等から独立種とする見解もある。

#### 偶蹄目（ウシ目） ARTIODACTYLA

##### イノシシ科 Suidae

40. イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus, 1758

分布：隠岐諸島を除く県内全域。島根半島には近年になって侵入し生息している。

##### シカ科 Cervidae

41. ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck, 1838

分布：島根半島・[ 中国山地など ]

県内に生息するニホンジカは、亜種として分類する場合は全てホンシュウジカ *C. n. centralis* Kishida である。

島根県：準絶滅危惧 N T

島根半島に生息する個体群は、現在、他の個体群から隔離された状況にある。県内各地で、希に単独個体が目撃される

ことがある。現在、増加傾向にある。

#### ウシ科 Bovidae

42. 固絶 ニホンカモシカ *Capricornis crispus* (Temminck, 1845)

分布：[ 中国山地 ]

島根県：絶滅 E X

『石見外記』、『諸国産物帳』等に、物産として「羚羊（かもしか）・かもしづ」の記述がある。鹿足郡吉賀町六日市の河津から広島県の冠山地域には明治初期まで生息していたらしい。この地方では「うししか」と呼ばれていた。

固 日本固有種

固属 日本固有属

固？ 日本固有種かもしれない種

帰 帰化種

絶 絶滅種

[ ]内の地域は、絶滅または見られなくなつた地域。

## II. 県内に生息の可能性がある種

1. 以下の翼手目 3 種は、広島県北広島町芸北の島根県境付近で生息が確認されているため、今後、県内でも見つかる可能性がある。

①クロホオヒゲコウモリ *Myotis pruinosus* Yoshiyuki, 1971

②フジホオヒゲコウモリ *Myotis fujiensis* Imaizumi, 1954

フジホオヒゲコウモリを、ヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi* Ognev, 1912 の亜種とすることがある。

③モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959

2. 過去の狩猟統計に「リス類」が上げられているが、これがニホンリス *Sciurus lis* かどうかは不明である。現時点では、県内にニホンリスが生息していたという確実な記録がないので、本リストからはずした。

ニホンリスは、『しまねレッドデータブック』には情報不足 D D に、環境省は絶滅の恐れのある地域個体群（中国地方以西のニホンリス） L P にランク付けている。

3. カワネズミとニホンモモンガが隠岐島後に生息するという噂があるが、定かではない。今後、調査の

必要がある。

### III. 三瓶山地域で目撃記録のある種

三瓶山地域では下記の31種が記録されているが、このうちの一部の種は、他地域から季節的に移動してきたり偶然的にやって来たもので、全ての種が常時ここに生息しているわけではない。また、ミズラモグラのように県内では三瓶山でしか記録されていない種もある。

#### 食虫目

##### トガリネズミ科

- |             |  |
|-------------|--|
| 1. サイゴクジネズミ | 普通に生息するよう<br>だが、見ることは少な<br>い。<br><br>2005年11月6日、<br>姫逃池畔で除草を行つ<br>た際に2頭の幼獣を目<br>撃し、他に2頭程の鳴<br>き声を確認した。 |
|-------------|--|

##### モグラ科

- |           |   |
|-----------|---|
| 2. ヒミズ    | 林内に、普通に生息。  |
| 3. ミズラモグラ | 北の原のキツネの糞<br>から1頭分の頭骨及び<br>骨片、体毛を確認した。<br>生体は、未確認である。 |
| 4. コモグラ   | 三瓶山では、北の原<br>でのみ生息を確認、少<br>ない。                        |
| 5. コウベモグラ | 草原や山林に、ごく<br>普通に生息。                                   |

#### 翼手目

##### キクガシラコウモリ科

- |              |                               |
|--------------|-------------------------------|
| 6. キクガシラコウモリ | 普通、三瓶自然館の<br>施設でも見ることがあ<br>る。 |
|--------------|-------------------------------|

7. コキクガシラコウモリ 同上。

##### ヒナコウモリ科

- |             |                                       |
|-------------|---------------------------------------|
| 8. モモジロコウモリ | 島根大学演習林内の<br>道路下暗渠で確認。三<br>瓶地域には休息場所が |
|-------------|---------------------------------------|

##### 9. アブラコウモリ

##### 10. ユビナガコウモリ

##### 11. コテングコウモリ

#### 靈長目

##### オナガザル科

##### 12. ニホンザル

少ないため、目撃例が  
少ない。

集落付近に生息。三  
瓶自然館の外壁に止  
まっていたのを目撃さ  
れた例がある。

北の原等の草原上空  
を飛翔しながら採食。  
三瓶山には集団で休  
息できる洞穴がないの  
で、石見銀山廃坑や海  
食洞から飛来するもの  
と考えられる。

まれに、民家などに  
舞い込むことがあるが  
少ない。

#### 兔目

##### ウサギ科

##### 13. ニホンノウサギ

まれに離れ猿の目撃  
はあるが、群れは見ら  
れない。

#### 齧歯目

##### リス科

##### 14. ムササビ

普通に生息。三瓶山  
では冬季に白化する個  
体は見られていない。

主に三瓶草原より外  
の山林に生息。

##### ネズミ科

##### 15. ハタネズミ

三瓶自然館周辺にも  
生息。

##### 16. カヤネズミ

水田やススキ草原等  
に営巣が見られる。

##### 17. ヒメネズミ

林内にごく普通。

##### 18. アカネズミ

林内にごく普通。

##### 19. ドブネズミ

主に集落周辺や民家  
内に生息する。

##### 20. クマネズミ

同上

##### 21. ハツカネズミ

同上

## ヌートリア科

## 22. ヌートリア（帰化）

三瓶で初確認されたのは志学で、美郷町柏淵の江川から遡上してきたと考えられる。大田市山口町と三瓶ダムで見られるものは宍道湖から神戸川へ入り、神戸川を遡上してきたと考えられる。

## 食肉目

## クマ科

## 23. ツキノワグマ

三瓶地域で毎年目撃があるが、飯南町や雲南市から移動してきたものと考えられ、三瓶山で冬眠するかどうかは不明。

## イヌ科

## 24. タヌキ

ごく普通に生息する。  
普通に生息する。

## イタチ科

## 26. テン

ごく普通に生息し、積雪期には、三瓶自然館の野外観察施設であるテンの小屋に入り冬越しする。

## 27. ニホンイタチ

主に三瓶高原より外の地域に生息する。

## 28. チョウセンイタチ（帰化）

三瓶町池田等の民家付近で捕獲例が数例ある。

## 29. アナグマ

普通に生息する。

## 偶蹄目

## イノシシ科

## 30. イノシシ

ごく普通に生息し、無雪期には室の内や、まれに男三瓶山山頂でも生息痕跡が見られる。

## シカ科

## 31. ニホンジカ

2004年秋に東の原でオス1頭が捕獲されたが、三瓶山に定住してはいない。

1. 三瓶山地区では未確認であるが、今後、見つかる可能性のある種。

## ①カワネズミ

『島根県に分布する獣類』には生息するとあるが、未確認。

## ②テングコウモリ

森林内に生息する可能性が高いが、未記録。

## ③ヤマネ

『島根県に分布する獣類』には生息するとあるが、未確認。

## ④スミスネズミ

『島根県に分布する獣類』には生息するとあるが、未確認。(2004年姫逃池南側で巣箱に営巣、ヤマネかは不明)

## 2. 付記：

①ニホンザル（離れザル）2005年7月10日三瓶ダムサイトで目撃。

②大山隠岐国立公園三瓶山の自然(1971.島根県)の23ページに、鳥地獄で死んだ「トガリネズミ」とされる写真が載っているが、中国地方にトガリネズミ類が生息している記録はなく、ジネズミと思われる。

## IV. 付 錄

## 「石見外記」に登場する哺乳類について

1820年に、浜田藩の家臣とされる中川顯允が著した『石見外記』(1973.工藤忠孝複製)に、物産の走獸部として石見に産する哺乳類についての記載があるので、そのほぼ全文を以下に現代語訳し、注釈を付しておく。

## 1. 熊 (89ページ)

この動物は、匹見あたりの深山中の洞穴にすんでいる。しかし、その数は多くない。その性質はおとなしく、人を害することはない。非常に臆病である(警戒心が強い)。もし、出産すれば、必ず海辺へ行って海水を浴びて身を清める。これを「潮掛け熊」と呼んでいる。熊の胆嚢は、効能が多いと医学書に出ている。

注釈：「出産すると、必ず海水を浴びて身を清める」というのは全くの誤りであるが、この記述から、江戸

時代にも子連れのツキノワグマが海岸部へ出没していたことがうかがえる。

## 2. 豺（さい）・狼（おおかみ）（90ページ）

山岳住民の話では豺（さい）と狼は異なるものだと言うが、だいたい似たような獣である。この動物は、野原のような草深い山に生息している。生息地には食い残された獸骨が山のように積もっている。深い森林を嫌うが、理由は熊を恐れるからだという。好んで鹿を捕食するが、2頭で挟み討ちしなければ捕ることはできない。鹿を捕えると、食い飽きるまで食べる。飢えれば、泥土を食べる。五穀は食べないし、被害も与えることはない。また、人に害を及ぼすことはない。狼は、大きな犬のような形態をしている。啼き声は牛に似ており、短くよく響き渡る。もしも、人が山道で狼に出会うことがあると、身を隠すことなどできなくなってしまう。また、狼が居る場所を通り過ぎようとするとき、その人の体中がチリチリとして、髪の毛は逆立って、手足は縛られたように動かなくなってしまう。しかし、そこを通り過ぎれば元に戻ってしまう。これは、この動物から発せられる「氣」によるものだろうか。夜中に出会うと、その目は光っていて、茶碗の大きさほどもあり、爛々としている。また、昼でも夜でも、途中から人についてきて、家までついてくることがあるが、これを送り狼と呼んでいる。

今から20年余り前（西暦1800年頃）に那賀郡（現在は浜田市）金城町七条で狼の群れを見たという人の話によると、次の通りであった。出鹿を撃とうと思い、猟銃を手に山の上で待っていたところ、遙か足下の小道を行く狼の一群を目撃した。狼は全部で18頭で、そのうち1頭は純白、2頭が白斑のあるもの、残りの全部が蒼黒色だったという。因みに、鹿は、昼間は人里遠く離れた山中に隠れており、夜になって餌を食べに出てくる鹿を出鹿（でしし）といい、明け方に山に帰っていくのを引き鹿という。

注釈：「豺」というのは中国ではイヌ科のドール *Cuon alpinum* を指す名称で、オオカミ *Canis lupus* を指すものではない。日本に棲息しないドールを江戸時代の日本の山岳住民が知っていたとは到底考えられないが、「やまいぬ」と狼は異なる動物であるという見解があるので、豺はやまいぬを指しているのかも知れない。また、やまいぬが野犬を指しているのであれば、オオカミとはもちろん異なる動物である。

オオカミが「氣」を放つというのは全くの誤りであるが、暗闇での恐怖心から身の毛がよだち身体が動きにくくなるということは、ありうることである。また、オオカミの目は光りを反射して光るのであり、暗闇で自ら光を放つたりはしないし、茶碗の大きさというの

も誇張されたものである。

浜田市金城町七条における狼の目撃談は非常に興味深いが、毛色などからは野犬を見間違えた可能性も考えられる。石見外記以外の江戸時代の狼図にも、純白や黒色、黒斑のものが描かれているが、江戸時代のオオカミは、このように毛色の変異が多かったのだろうか。あるいは、野犬の誤認だったのだろうか。直良信夫（1965）は、ニホンオオカミのものとされる頭骨の形状を詳しく調べて、ニホンオオカミは絶滅したのではなく飼い犬と混血した可能性があると述べている。

## 3. 萬歳（まんさい・あしか）附 海鼠（うみねづみ）（93～94ページ）

萬歳は、だいたいその形はカワウソに似ている。長さは3尺余り、蒼赤色で鹿の毛色に似ていて、小白点がある。頭は鹿のようで、歯は大変小さくよく並んでいて、手足はない。両脇には黒色の肉鰭～例えば厚い紙台羽のようである～がある。尾も肉鰭である。尾にも鰭にも、小さな5つのツメがある。

この海獣は、先年、浜田城外の海浜にあるユルキ島という小島で、3日3晩岩の上で熟睡していた。その後、どこかへ行ってしまったと聞いていたが、文化年代になって死体が両度に漂着したのを見た。また、往年、石見の漁師に聞いたところでは、萬歳とは、この獣がよく海中に舞うことから名付けられたということである。また、人が危害を与えることはない。もし、人が誤って殺すとしたら、釣りに出て漁が無かったときである。たとえ見つけても、見逃してやるという。さらにまた、ある人の話では、浜田城の西の瀬戸ヶ島で釣りをしていると、この獣が5、6間余り離れた岩に海中から上がってきた。特に人を恐れることもなく、少ししてまた海中に隠れてしまった。

また、この仲間の種類に海鼠という海獣があり、その形は萬歳に似ていて、大きさは中型の犬くらいである。これには四肢があって、海中にもすみ陸にも上がる。～瀬戸ヶ島では度々見たということである。

私が考えるところでは、萬歳は海獣ではあっても足がないから陸に上がるのが難しく、魚のような鰓穴が無いので海底に長い時間潜っていることはできない。だいたいは海岸の岩穴などに隠れていて、海藻などを食べて生きているのではないかろうか。

古事記にミチ～記事記抄に詳しく述べられている、倭妙抄に葦廉（あしか）～和名：阿之加、蝦夷志に海鼈（とど）・海鼈などとあるものと同じものか、似た種類であろう。

注釈：江戸時代末に浜田城付近の海岸でアザラシやアシカかオットセイが時々見られたのは確からしいが、石見外記では上記の3種が混亂して記述されてい

るようと思われる。また、海獣類は魚食が主であり、海藻を食べたりしない。

萬歳の形態についての「体は鹿のような蒼赤色の毛色で、白斑がある。手足がなく胸に肉鰨があり、肉鰨と尾には5つのツメがある」という記述がある。この中で、肉鰨と尾とされているものは前後の肢（鰨脚）である。アザラシの場合、前後肢ともに先端部にツメを備えているが陸上での歩行はイモムシ様歩行で、後肢は後方に伸ばされた形で尾と見なせなくもない。従って、四肢に関するこの記述はアザラシを指していることがわかる。島根県近海で見られるかも知れない白斑のあるアザラシ類としてはワモンアザラシを考えられるが、分布的にやや難がある。県内沿岸で希に見られるのはゴマファアザラシの方だが、毛色は灰色で黒点があり、萬歳についての記述とは異なる。「頭が鹿のよう」という部分は、アシカについて述べているように思われる。また、毛色や白斑については、今泉(1969)が、クロアシカのオスは全身が焦げ茶色で、しばしば灰白色の斑紋があると記しているように、アシカの特徴を示している。しかし、アシカの前肢にはツメはなく、後肢のツメは足の先端ではなく鰨状部の中途に位置していて、後肢は陸上では歩行に用いられているから尾とは言い難く、石見外記の記述とは異なる。

また、海鼠の形態について「萬歳に似ていて、四肢があつて陸上にも上がる」という記述からするとオットセイを指しているものと思われるが、中型犬の大きさということから考えると、アシカかオットセイの幼獣か若獣である可能性がある。興味深いことに、浜田市瀬戸ヶ島あたりで度々見られたということである。

最近でも、島根県沿岸でキタオットセイやゴマファアザラシが目撃されることがある。2005年に浜田港にキタオットセイが侵入し、衰弱していたため保護されたが、まもなく死亡している。

#### 4. その他の哺乳類 (91~92ページ)

**野猪** (=イノシシ) この獣は首（後方）へ顔を回すことができない。性格は勇敢である。もし傷を蒙ったときは「手負いじし」と言って、一段と攻撃的になる。死ぬ時は、立ったままで死ぬ。イノシシの胆もまた薬品である。

**鹿** (=ニホンジカ), **羚羊** (かもしづ=ニホンカモシカ), **猿** (=ニホンザル) 猿は群れで行動することが多い。胆は薬品となる。**飛倉** (のぶすま=ムササビ) このものは鳥類と獸類の両方に入れられたりしていた。むささび・ももんぐわ・そはらしき等の名がある。たいてい深山にすんでいる。**兎** (=ノウサギ)。

**狐** (=キツネ) 妖獸であることは誰でも知っているが、匹見山中のキツネだけは化けることを知らないと

いうことだ。

その他、**野狸** (たぬき=タヌキ), **貉** (むじな=アナグマ), **マミ**, **ササマミ**, **獺** (=カワウソ), **貂** (てん=テン), **鼠狼** (いたち=ニホンイタチ), **僵鼠** (うころもち=モグラ), **田鼠** (のねずみ=カヤネズミ?), **鼠**等の記載がある。

注釈：平仮名及びカタカナの太文字で書かれた動物名は原文中に記されているもので、カタカナ細文字の動物名は筆者によるものである。

イノシシが立ったまま死ぬというのは、全くの誤りである。

**ムササビ** *Petaurista leucogenys* の古称に「ももんぐわ」があるが、現在でも地域によってはモモンガ属モモンガ *Pteromys momonga* と混乱が見られることがあるので、聞き取り調査などを行う際には注意が必要である。

キツネに関して、「匹見のキツネだけは、化けることを知らない」と書いていているのは大変興味深い。というのは、「匹見の住人は（キツネを正しく観察していて）、ここのキツネが化けないものと認識している」ということになるからである。

たぬき・むじな・マミ・ササマミはタヌキとアナグマの別名であるが、全国的に名称の混乱が見られる。たぬき・むじなはタヌキを、またはむじながアナグマを指していることがあり、マミとササマミはアナグマを指している場合が多い。

#### 5. 犬蟲（イヌカミ）図 (53, 104 ~ 106 ページ)

注釈：走獣部にではないが、「石見の国下賤の者の家にイヌカミといえる邪神あり～云々～」という記述とともに、土佐藩の平尾長左衛門政香より借用して描き写したという「イヌカミ」の図が載せられている。図の解説には「土佐国高岡郡須崎邑百姓の家にて猫の取る所のものの写（大きさ常の鼠の如く、毛も同じ）。周にてイヌカミという者は、鼠の如くにして毛短く光りあり」とある。図の解説には、大きさは普通のネズミくらいで毛もネズミ同様であり、猫が捕らえてきたと記されている。

イヌカミが実在するか否かは別として、この「犬蟲図」はジネズミ *Crocidura dsinezumi* をスケッチしたもののように思われる。ジネズミの幼獣は、体毛が短く非常に光沢がある。

この図の動物に似ているものにはジネズミのほかにトガリネズミが考えられるが、中国地方にトガリネズミ類は分布していない。四国では石鎚山から剣山にかけての標高800m以上の山岳地帯に、シコクトガリネズミ *Sorex caecutiens shikokensis* Abe,1967が生息している。しかし、高岡郡須崎が現在の高知県高岡

郡にある須崎湾あたりであるとすれば、「イヌカミ」が海岸近くの百姓家の猫に捕らえられたということであり、また、大きさからもジネズミと考えるのが妥当だろう。実際、家猫がジネズミやヒミズを捕らえてきて玄関先に放置しているのはよくあることである。

因みに、ある種のトガリネズミ類の唾液には有毒成分が含まれていて、噛まれると人間でも死ぬことがあるといわれている。イヌカミが実在し、それがトガリネズミだとすれば、このことが「イヌカミが人に憑くと、大熱を発し死に至ることがある」として恐れられている理由なのかもしれない。

## 6. 鹿皮（51 ページ）

注釈：「鹿皮ただ邑智郡にのみ産するにはあらず、諸郡に通して出すことを知るべし。」

とあることから、当時はニホンジカが県内各地に普通に生息していたことがうかがえる。

## 参考文献

- 広島哺乳類談話会編(2000)「広島の哺乳類」, 169pp. 中国新聞社.  
 伊藤徹魯(1996)古文献の“アシカ”的検討－共同研究の呼びかけ, 1995年度アシカ談話会, 哺乳類科学 Vol.35, No.2 : 178-179.  
 今泉吉典(1969)「原色日本哺乳類図鑑」, 196pp. 保育社.  
 今泉吉典(1970)「日本哺乳類図説」, 350pp. 新思潮社.  
 加藤琢矛・大畠純二(1994)哺乳類, 木村コレクション隠岐産動

- 物標本目録(2). 隠岐の文化財11: 1-10.  
 直良信夫(1965)「日本産狼の研究」, 290pp. 校倉書房.  
 中川顯允(1820)工藤忠孝複製(1973)「石見外記」(全), 113pp. 石見地方未刊資料研究会, 島根県立大田高等学校図書館.  
 日本哺乳類学会編(1997)「レッドデータ日本の哺乳類」, 279pp. 日本哺乳類学会.  
 盛永俊太郎・安田健編・谷口澄夫解題(1987)「隠岐・出雲・播磨・備前・備中・亨保元文諸国産物帳集成」第VII巻, 9 : 124-350. 科学書院.  
 大畠純二(1984)石見銀山の哺乳類－コウモリ. 郷土石見13 : 90-94.  
 大畠純二(1986)1982年に採集したネズミ類と食虫類. 島根野生研会報4 : 32-34.  
 大畠純二(1989)島根県におけるコウモリの分布島根野生研会報6 : 1-6.  
 大畠純二(1990)島根のコウモリ. 島根県立江津高校研究紀要2 : 25-32.  
 大畠純二(2003)島根県で初めて生息が確認されたコモグラとミズラモグラ. 島根県立三瓶自然館研究報告1 : 3-8.  
 大畠純二(2004)哺乳類. 「改訂しまねレッドデータブック」, 25-34. 島根県.  
 澤田勇(1976)糸虫相からみた日本産キガシラコウモリ科コウモリの分布に関する2, 3の知見. 動雜, 35 : 140-155.  
 澤田勇(1984)山陰地方における洞穴棲コウモリの分布及びその内部寄生虫相. 奈良教育大紀要, 33 : 33-44.  
 澤田勇(1986)隠岐諸島における洞穴棲コウモリの分布及びその内部寄生虫相. 奈良教育大紀要, 2 : 145-151.  
 島根県農林水産部(1980)「島根県に分布する獣類」105pp. 島根県  
 土屋公幸(1988)日本産モグラ科の染色体による分類. 哺乳類科学28(1) : 49-61.